

修 士 論 文 の 和 文 要 旨

大学院 情報システム学研究科 博士前期課程 情報システム運用学専攻		
氏 名	朝鍋 陸央	学籍番号 0552002
論 文 題 目	水害時を想定した避難状況提示システムの提案	
<p>要 旨</p> <p>本研究では水害時に住民を避難に導ける情報を考察した。</p> <p>現在、水害時の状況把握を支援する情報の提供は整いつつある。しかし住民が河川の氾濫が予測できても、それが避難行動につながらなければ危険から逃れることはできない。そこで、状況を認識してから避難行動までを以下のように段階化し、考察することにした。</p> <ul style="list-style-type: none">①状況認識：危険があると予測する、または周囲が避難していると把握する②避難必要判断：避難した方が良いと、客観的に考える③避難欲求判断：避難したいと考える④避難行動：実際に避難する <p>この4つの段階の関係を調べるために、水害経験者へのアンケートを実施した。その結果から、以下のことが判った。</p> <ul style="list-style-type: none">・危険があると予測すると、避難した方が良いと考えやすいが、避難したいとは考えにくい。・周囲が避難している状態であると、避難した方が良いとはやや考えにくいが、避難したいとは考えやすい。 <p>この結果より、危険予測からは生じにくい「避難したい」という欲求が、避難状況にて促せることが判った。また、</p> <ul style="list-style-type: none">・避難欲求があればほとんどの人が避難した <p>という結果と合わせて、避難状況は避難行動の新しい手助けになると考えられる。</p> <p>また、本研究では仮説「周囲の避難率が地図上で確認できるシステムにより、住民が避難した方が良いと考えるようになる」を実験にて検証することにした。この仮定が正しければ、このシステムを用いることにより住民を避難に導けると期待できるからである。</p> <p>実験は水害に関する情報を得られるシステムを想定した。被験者は提示された情報を元に避難するか待機するかを判断していく。そして避難すると選択した割合、および「どの情報を参考にしたのか」という質問の回答から実験を評価した。</p> <p>実験の結果、周囲がある程度避難していると、「避難した方が良い」と考えやすくなることが判った。</p> <p>実験結果およびアンケート結果から、提案システムにより住民を避難に導けるという考えに至った。</p>		